

第12回胸部外科学会主催の思い出

第12回 会長 中山 恒 明

日本胸部外科学会も年々沢山の演題と、大勢の聴衆が参加するようになって非常な盛会に発展したことは御同慶のいたりと存ずる次第である。胸部外科学会といういわゆる外科学の一部、胸部をとりあつかう学会でその分野が狭められたように考えられるが、今日各分野で一層深く専門化して胸部をとってみても、胸壁・肺臓・心臓・縦隔洞・食道等の部分が同じ胸部にあっても、診断法・手術法・ならびにその病態生理等全く異なった形相を呈し、特にその研究方法・研究データ等については非常に細かな専門化した成績をうるようになったために、胸部外科の専門家であってもその全部を了解することは困難である事態となった。また、一方学会の総会というものについて、その目的を考えてみると、勿論、学会であるのでその年の新しい研究成果の発表というものの場であると考えるが、参会者の過半数がすでに大学の教室もしくは研究室をてた臨床第一線の人々であるので、その人達に実際臨床に必要な新しい知識を与える、いわゆる卒後教育的な役割をも負わされておるものと考える。勿論、総会は全国の医師の集まる機会であるのでお互いの懇親・理解等を深める機会でもあると思う。

私は日本胸部外科学会第十二回会長として、少なくとも臨床第一線に活躍している人々に現在の各分野における胸部外科レベルをその分野で実際に活躍している人々に、特別講演の形でわかる話を話してもらうことにきめて、これを第一会場にて終日、基礎的なものから胸部の全部について、すなわち胸壁・肺臓・心臓・縦隔洞・食道等にわたってくまなく、問題となっている点を主体として講演してもらった。また一方、第二会場は各分野における大家を座長にお願いして、その分野の研究発表を在来の学会のごとく終日これを行い、若い研究者の発表の場とし、また討論の場とした。その上第一会場において各領域の問題点をその専門家に出席していただいて、パネルディスカッションの形で、聴衆にわかりやすく、今日までわかった点、今後の問題点、今後の研究の方向等をそれらの人々に話していただき聴衆の便宜と利益をはかることに努力する計画を立てた。いま学会を振りかえってみて、色々御批判もあることとは思いますが、一応在来と違った形式での学会として、ある程度の成果を収めえたと思う。

今後学会を主催なされる方々は、今回の学会の良いところを採り、悪いところを捨てて、本会がより一層有益な充実した良い学会となることを期待してやまない。

第12回胸部外科学会総会感想記で白羽弥右衛門先生が書かれたことの一部を転載すると、「今年度の日本胸部外科学会総会は、すでに第12回を数え、中山恒明教授のまことにたくみな企画ぶりで、きわめて多彩に催された。わたくしは、前年度と前々年度の本会に、在外のため出席することができなかったので、久しぶりにきく本年度の総会を心たのしく拝聴して、その進展ぶりにおどろいた。本年度も会場が2カ所にわけられており、一般会員の演題は比較的短時間内で発表され、

108題におよんでいたが、やはり肺、胸壁に関するものが多く、肺の病態生理とくに肺水腫に関連したものが目立っていて、27題を算し、ついで肺結核に関連したものが26題、気管・気管支の問題をとり扱ったものが6題あった。ふしぎなことに、肺癌を直接とり扱ったものが2題しかなく、また縦隔自体に関したものは1題しかだされていなかった。しかし、わたくしにとっては、実験的吟味

の上で抗結核剤がとくに発癌作用を示さなかったとの報告をきくことができたのはうれしかったし、肺結核の関連は、やはり今日においても胸部外科学会の主体をなしていることにかわりがない。108題中26題が肺結核の外科的療法に関するものである。ついでながら血管、心臓に関連したものが27題、食道外科に関連したものが4題あった。わたくしは昨年5月、ちょうどボストン市に滞在中であったため、第38回アメリカ胸部外科学会を傍聴することができた。この総会では、3日間にわたって42題の演題が報告されたが、心臓血管に関するものももっとも多くて26題、肺の病態生理に関するものが5題、肺癌3題、肺結核2題、胸壁に関するものが2題で、そのほか食道1題その他に関するものが3題報告されていた。わが国の胸部外科とアメリカのそれとの動向がこの出題のなかに示されているようである。」とある。これによって、当時の学会の出題の種類と傾向がわかると思う。特にアメリカにおいて、心臓血管の分野の演題の多いことは今日の胸部外科学会の状態を示唆しているものと思う。

東京女子医大消化器病センター名誉所長